

実践レポート / 探究の窓

VOL.1

2022年度からスタートした総合的な探究の時間。
現場で試行錯誤が続くなか、
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

「なぜ」を起点に、

探究のサイクルを

自分で回す力をつける

菊里高校（愛知・市立）

School Data

1896年創立 / 普通科・音楽科 / 生徒数1035人（男子492人・女子543人） / 進路状況（2023年3月卒業）大学268人、専門学校1人、その他81人

教員みんなで考えてみんなで
取り組む、持続可能な取組に

2021年度より総合的な探究の時間を
実施してきた名古屋市立菊里高校。1、2
年生の探究の授業は、クラスの副担任とキ
ャリアナビゲーター[※]がペアで担当し、密に

年間スケジュール

【探究基礎】

探究のスキルを習得する

- 入学前…入学前課題。副教材を読むなどしたうえで、興味のある社会問題や身の周りの課題についてワークシートに記入する。
- 1学期…ディベート。日本の社会問題について与えられたテーマでディベートをする。
- 2、3学期…課題研究。「学校」をテーマにグループごとに課題を挙げ、より良い学校・学校生活にするためにはどうしたらいいかを深めていく。学年末にはポスター形式の発表会を行う。

1年

【探究実践】

本格的に探究活動を行う

- 春休み…春休み課題。副教材を読むなどしたうえで、興味のある社会問題についてワークシートに記入する。
- 通年…自分の興味・関心のあるテーマを選び、課題を設定。仮説を立て、自分で集めた情報を基に仮説を検証していく。学年末にはPowerPointでまとめた資料を基にプレゼンテーションを行う。

2年

【探究発展】

探究活動を進路につなげる

- 1学期…自分が取り組んだ探究活動についての研究要綱を作成。大学の志望理由書を探究と関連づけて書く機会もある。
- 2学期…選択課題。外部コンテストに挑戦することも奨励している。

3年



写真左から、探究部の久賀史恵先生、キャリアナビゲーターの若林かおりさん。

連携しながら生徒の学びを支えている。

2年余りをかけて準備を進め、カリキュラムの作成や運営体制づくりと並行して、広く教員の声を聞きながら探究学習への理解の浸透に努めていった。重視したのが、「持続可能性」と「ポトムアップ」の2点だ。探究部の久賀史恵先生は、こう話す。

「公立高校では教員の異動があるなか、人が代わっても継続する取組にしたいという思いがありました。また、探究学習を学校の文化にしていくなにも、みんなで考えてみんなで取り組むという空気も大事にしてきました」

教員を対象にしたアンケートで、育てたい生徒像、身につけさせたいスキル、体験させたい活動、アウトプット・成果物のあり方などについての意見を集め、それぞれを言語化して共有。さらに、全教員で「分散会」を開いて意見を交わし、目指したい授業や菊里高校の探究のあり方について具体化していった。

こうして生まれた探究のキャッチフレーズは、「みんなの『なぜ』が社会につながる

みんなの「なぜ」が未来につながる」。自分の身の周りがある困りごと、疑問、違和感から生まれる「なぜ」を起点に、段階的にレベルを深めていく探究のためのカリキュラムが組まれた。

ディベートと課題研究で 探究のベースを身につける

1年次の「探究基礎」では、探究のスキルを習得。1学期には身近な課題や社会問題についてのディベートを行う。久賀先生は、次のように解説する。

「客観的な根拠を挙げて議論する、仮説を立て証明する、相手からのフィードバックを受けて議論を深めるといったディベートの手法は、探究のサイクルに通じるものがあります。司会やジャッジも生徒が務め、毎回、とても白熱します。ただし、勝ち負けで終わるのではなく、両サイドの主張が理解できた次のフェーズとして、じゃあどうしたらいいかをみんなで考える、敵味方のないノーサイドアクティビティを取り入れています」

2、3学期には、テーマに基づく課題研究を行う。お題は「学校」。具体的な課題を挙げ、より良い学校にするにはどうしたらいいかをグループで探究する。「2年次の実践的な個人探究に向け、探究のサイクルを回す練習をする」という位置づけ」と久賀先生。「虫が多い→ヤギを飼う」「駅からの坂道が大変→シャトルバスを出す」というユニークなものなど、生徒たちは身近な課題を解決するためのアイデア（仮説）を出し合い、それを教員や外部専門家への

※名古屋市が実施する「名古屋市キャリアサポート事業」により各校に配属されるキャリアコンサルティング人材。

課題A	
2年生での探究テーマの候補を挙げる	
2年生では、「個人研究」「自由テーマ」で探究活動を行います。そこで、研究のテーマを決める最初のステップとして、以下の流れでテーマになりそうなことを挙げてもらうのが目的です。4月から、1年間がワークした状態で探究活動するテーマが選べます。	
① 下のA-Dの項目について研究したい、② ①にはいる言葉や疑問を挙げてみよう。 ※選んでいいOK ③ ①が選んだことの中で、興味があることについて情報を集め、②の時に説明しよう。 ※今後研究テーマ候補に決まるとは限りません。	
A:自分の興味関心 1. 言葉、疑問 2. 調べたこと、集めた情報 3. 疑問点	B:日常の疑問 1. 言葉、疑問 2. 調べたこと、集めた情報 3. 疑問点
C:社会の課題・話題 1. 言葉、疑問 2. 調べたこと、集めた情報 3. 疑問点	D:学問上の課題 1. 言葉、疑問 2. 調べたこと、集めた情報 3. 疑問点

「教員用シート」	
GOAL2 1. 生徒が探究活動を通じて自分の興味関心について、自分とテーマとの関わり（なぜこのことを研究したいのか）について、授業の中で探究の関わり合いを深めよう。	2. 生徒が探究活動を通じて自分の興味関心について、自分とテーマとの関わり（なぜこのことを研究したいのか）について、授業の中で探究の関わり合いを深めよう。
3. 生徒が探究活動を通じて自分の興味関心について、自分とテーマとの関わり（なぜこのことを研究したいのか）について、授業の中で探究の関わり合いを深めよう。	4. 生徒が探究活動を通じて自分の興味関心について、自分とテーマとの関わり（なぜこのことを研究したいのか）について、授業の中で探究の関わり合いを深めよう。



■写真上：1年次のポスター発表の様子。グループで役割を決め、クラスメイトの前で発表する。■写真下：2年次の「探究実践」の発表の様子。「認知症の祖母と連絡を取る方法（関与観察）」、「笑いのツボの所在」（街頭インタビュー）、「M-1グランプリ必勝法」（ポケの種類や頻度の数値化）、「月経教育の浸透」（家族への模擬授業）などテーマは多岐にわたる。

「調査」の位置づけを明確に

2年次の「探究実践」では、自らが選んだテーマについて問いを立て、調査や実践を行いつつながら情報を集め、分析・検証していく…という本格的な探究学習に取り組む。最後はPowerPointでまとめた資料を使って各自がプレゼンテーションを行い、生徒の評価で選ばれたクラス代表が、学年全員の前に発表する。

1年次の春休みの課題（上）。2年次に取り組む個人探究テーマの候補として、「自分の興味関心」「日常の疑問」「社会の課題・話題」「学問上の課題」の4つの観点で気になることを調べる。その後の2年次の授業では、調査結果を発表用シート（下）にまとめ、3分以内でクラスメイトに伝える。

「1年目は、最初にしっかりと課題を設定することが大事だと考え、生徒にもそう伝えていました。しかし、テーマを決めて問いを立てても、それについて調べるなかで、この問いじゃなかったなとか、こっちの視点の方がいいなとか、生徒自身に気づきがあることが多くて。2年目には、テーマや問いはとりあえずの仮置きでいい、調べたり考えたりする過程を通して変わってほしいと、伝えるようになりました」

また、1、2年目は校内でのアンケート調査を行う生徒が多く、「調査」の意味を改めて考える機会になったと、キャリアナビゲーターの若林かおりさんは言う。

「アンケートの結果は結論として、調べ学習で終わってしまう生徒が複数見受けられました。仮説を立てるために行う調査なのか、仮説を立証するために行う調査なのかを明確にしたうえで、インタビューや視察なども含めてどういう調査を行いその結果をどう使うのかという計画を事前に立てる必要性に私たちも気づかされました。今は、一次情報を大事にすること、その情報をどう活用するかを考えることを、1年生の段階から伝えるようにしています」

若林さんは1、2年生のすべての探究の授業に参加しており、学年ごとの探究担当の打ち合わせにも出席している。

「初めて探究を担当する先生は不安を抱えているケースもあるので、前年までの生徒の事例を挙げながら、良かった声かけや伴走の仕方をお伝えするようにしている」と若林さん。久賀先生も「他の学年やク

ラスの様子や事例を共有してもらえると、はともありがたい」と言う。

校内外との連携を強化し、探究を基軸に一体感ある学校に

3年次の「探究発展」では、2年次までの探究活動を進路につなげていく。自分が取り組んだ探究についての研究要綱を作成したり、大学の志望理由書を探究と関連づけて書いたりする機会を設けている。外部コンテストに挑戦することも奨励しており、実際に応募する生徒も出てきているという。

「本校は一般選抜志願者が多いですが探究での積み上げを活かして、学校推薦型選抜や総合型選抜を受験する生徒も出てくるのではないかと期待しています。探究に取り組んだ経験があることで、知名度だけで大学を選ぶのではなく、自分の興味・関心と紐づけながら選ぶ生徒が増えるのではないかと感じます」（久賀先生）

3年目を迎える菊里高校の探究。「まだまだ試行錯誤の連続」と久賀先生は言う。「今後は、もっと生徒を外に出したいです。地域の事業所の見学会などを行い、生徒が社会を知る機会を増やしたいと考えています。探究をサポートしてくださる外部人材を増やして、外からもより多くの人に来てもらいたいですね。また、先日、図書館部、進路指導部、探究部が連携して大学の先生の講演会を開催したのですが、それぞれが持ち味を發揮したとても良い行事になったので、こうした校内連携の取組を増やして学校として一体感を出せる」といいます。

まとめ

菊里高校の探究のモットー

「みんなの『なぜ』が社会につながる みんなの『なぜ』が未来につながる」をキャッチフレーズに、「失敗を恐れず、とにかくいろいろやってみる!」を大事にしている。

#学校課題 #地域課題 #自分の興味・関心

課題は仮置きでもOK。 調べる過程で定まってくる

取り組むテーマや問いは仮置きでもよしとする。なかなか課題が決まらない生徒が一定数いるなか、課題設定のハードルを下げたためにも、「とりあえず」でOK、調べるなかで変わってもOKと伝えている。

アンケート調査が主流。 外に出て一次情報を!

生徒には、実験、視察、アンケート調査、インタビューなど情報収集のさまざまな手段が紹介されるが、取り組みやすい校内でのアンケート調査やインターネット検索を選択する生徒が多いのが実情。今後に向けた課題でもある。

課題の設定

情報の収集

整理・分析

まとめ・表現

高校での探究経験が 大学での学びにつながる

1年次にはポスター形式、2年次にはPowerPointを使ったプレゼンテーション形式でまとめ・発表する。2年生のクラス代表の探究は質が高く、それを見た生徒にとっては刺激となり、次の探究サイクルへのスイッチになる。

調査結果＝結論ではない! 情報の位置づけを明確に

アンケート調査で見えてきた結果から「こうである」と結論づけてしまう生徒もいる。調べ学習で終わらせないためには、情報をいかに整理・分析するか、情報を何のために使うのかを理解させることが重要。

探究設計のPOINT

POINT ① テーマ指定のディベートと課題研究で探究のベースを体験する

POINT ② 「なぜ」を起点に、自分の興味・関心に基づく課題を探究する

POINT ③ 1・2年次の探究活動を振り返り、自分自身の進路につなげる

評価基準

自己評価用ルーブリック (2年次)

評価項目	評価観点
課題の設定	自分独自の関心に基づき、テーマ、問い(リサーチエスション)、仮説を作ることができたか。
情報の収集	資料やデータを精選し分析し結論を得ることができたか。
整理・分析	研究の結果に基づいた考察を行い、結論を導き出しているか。
主体性 レジリエンス	粘り強く主体的に取り組む姿勢をもつことができたか。